

『今月の天候と農作業』

通巻第5599号
1月号
平成29年1月6日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【 確 率 (%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	40	30
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	30	40	30

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は、平年並または低い確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 1月7日(土)～1月13日(金)

期間のはじめは低気圧や前線の影響で曇りや雨となるでしょう。その後は、高気圧に覆われて概ね晴れます。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2 週目の予報> 1月14日(土)～1月20日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から4週目の予報> 1月21日(土)～2月3日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆早期水稲

1 種子の選別と消毒

種子は枝梗をよく取り除き塩水選を行い、その後、水で洗い流します。

種子消毒は籾袋に余裕を持たせ薬剤が袋の中心部まで十分に届くようにします。籾に気泡が付いていると防除効果が低下するので、袋を揺すり気泡をよく抜きます。薬液の水温が10℃以下では効果が劣る場合があるので、薬剤毎の温度や時間を守りましょう。近年、温湯消毒法が増えてきていますが、割れ籾の多い種子や一部の品種によっては発芽率が低下する場合もあるので、事前に確認します。

2 浸種と催芽

浸種の水量は種子籾の二倍以上とし、期間は水温が10℃の場合は10日間、15℃の場合は7日間程度、行います。水の交換は薬剤効果を安定させるため、3日目以降から行います。籾袋の数が多き場合は時々、位置を入れ替え、温度や酸素が均等になるようにします。十分に浸種してくると籾の胚の部分の白く見えるようになります。浸種後は一昼夜ほど30～32℃で、芽が1mm程度伸びた状態まで催芽します。水切りを行う際は夜間の冷え込みで発芽障害を起こさないように注意します。

◆ムギ類

1 麦踏みと追肥

麦踏みは耐寒と耐干性を高め、分げつの増加や稈の伸びすぎを抑える効果があります。節間が伸び始める2月中旬までに2～3回実施します。霜や露がある時や茎の水分が高い時に行うと茎葉の損傷が大きくなるので土壌や株の水分が低い乾燥した時に行います。

分げつ肥は1月中旬に窒素成分で10a当たり2.5kg程度で行い、条播きの場合は土入れします。

(荒砂 英人)

施設野菜

◆共通事項

晴天日の午前中はハウス内の温度を十分確保し光合成を促進させ、午後からも急激に温度を下げないように換気には特に注意します。夜間、暖房機の設定温度より実際の最低温度が低くなる場合があるので、翌朝冷え込みが強いと予想される場合には暖房機の設定温度を普段より高めに設定し、実際の最低温度を維持します。

かん水は、地温低下を防ぐため、晴天時の午前中（早い時間帯）に行い、液肥での追肥は硝酸態窒素主体のものを施用します。

◆きゅうり

①摘心栽培：草勢が低下すると不良果が発生するので早めに摘果を行います。また、採光・通風を良くするために、生長点を2～3本確保しながら、込み合った場所は黄化した葉や病気等の入っている葉を中心に整理します。追肥は月に窒素成分で5～6kg/10aをかん水時に施用します。

②つる下ろし栽培：日照、低温等の影響による「心止まり」が発生しやすい時期です。生長点の状態を確認しながら、草勢が弱い場合には3節に1果程度を摘果し、着果負担を軽減します。また、過度の摘葉は草勢低下を助長するため、収穫節位から下5～6枚は葉を残します。

◆ピーマン

促成栽培は、着果量が多いと草勢が低下しやすくなるので、かん水を増やし、夜温を普段より高めに管理し、果実の肥大を早めます。また、追肥遅れに注意し、2月までは月に窒素成分で3～4kg/10a施用します。

◆トマト

特に光を必要とする作物なので、日照がある間は内張ビニルを十分開け、光の確保に努めます。果実肥大、着色促進、食味向上のためには、15～18枚の葉が必要なため過度の摘葉は避けます。

◆いちご

食味低下や小玉果となりやすいため、午前中は25～28℃を目安に高めに管理し、開花から45日程度で収穫できるようにします。また、1果房当たり10果前後になるよう摘果します。

液肥主体で、月に窒素成分で2～3kg/10aを追肥しますが、かん水・追肥ともに生育を見ながら控え気味に行います。

(黒木 正晶)

葉茎菜類及びいも類

ハウスやトンネルによる半促成栽培の播種期及び早熟栽培の定植期となります。支柱立てやビニール被覆など植え付け準備を計画的に進め、植付けや播種が適期にできるようにします。

◆スイートコーン

ハウス、ミニハウスは中旬から、大型トンネルは下旬から播種適期となります。地温が低いと発芽率が低下するので、地温を高めに保持することが重要です。播種1週間前までにはトンネル被覆を行い、地温を確保してください。なお、ハウスやトンネルの大きさや被覆資材の素材や厚みで温度確保の能力が異なります。温度管理が適切でないと桿が伸びすぎてトンネルを除く時期より前に葉や雄穂がビニールに接触し、先端不稔等の品質低下を招きますので、生育ステージに応じた保温と換気に十分注意しましょう。また、来月播種する小型トンネル栽培の準備も始めましょう。

◆食用かんしょ

トンネル栽培用の育苗時期です。本ほ植え付けの60日前を目安に種芋を伏せ込みます。夜間は保温資材で被覆し、最低地温が20℃以下にならないようにします。萌芽後、苗の増殖期間中は日中の温度で25℃を保ちます。30℃以上に上昇しないように換気に注意し、丈夫な苗に仕上げます。植え付けの約10日前から暖かい日中にはできる限り換気して外気に慣らします。

◆ばれいしょ

春作は下旬より不織布被覆栽培の植え付け期となります。ばれいしょは植物防疫法の指定種苗ですので植物防疫検査印のある健全な種芋を用いましょう。種芋は30g程度の大きさのものが適していますが、芋が大きい場合には、いもの生長点から基部に向けて縦割りし、使用します。

◆ごぼう

9～10月にかけて播種した水田ごぼうが収穫期に入ります。収穫開始時期の目安はマルチ栽培では播種後130日、トンネル栽培のものは播種後100日くらいです。

(杉村 幸代)

果 樹

1 常緑果樹

◆ 完熟きんかん

1月中旬から完熟きんかんの出荷が始まります。収穫は着色や食味を確認しながら開始します。

収穫が始まったら、過熟やうるみ果を防ぐために昼温は15℃を目安に管理します。また、裂皮を防止するために早朝の換気等を行い、施設内の湿度を低く維持しましょう。

完熟果実は打ち身や圧迫による傷害を受けやすいので、収穫カゴ周囲の緩衝材設置や果実の過度の積み重ねを避け、取り扱いには十分注意しましょう。

◆ マンゴー

今年は10から11月の高温により萌芽のばらつきや弱い花芽の発生が見られます。このような園では、結果不良やミニマンゴーの発生が予想されますので、昇温の過程を例年よりも慎重に行い、じっくりと花芽を作りましょう。

開花期に湿度が高いと花穂の軸腐病や果実の灰色カビ病が発生し、果実品質が低下します。換気や夜間の十分な加温により、湿度を低く保ちましょう。花穂が伸びてきたら、ひもでつり上げ、風通しを良くすることも重要なポイント

ントです。加温用のダクトを使って病気の発生を抑制する方法もあります。気になる点については最寄りの普及センターやJAに相談してください。

また、満開期のホウ素剤の散布や幼果期のカルシウム剤の散布により、果実の生理障害を防止しましょう。

2 果樹全般

◆ 縮間伐・剪定

多くの果樹で初期収量を確保するために計画密植栽培が行われています。枝が隣の樹と触れはじめたら縮伐や間伐を実施しましょう。

剪定においては主枝、亜主枝の配置を考えた剪定が重要です。また近年、多くの果樹で着花不良や結果不良が見られます。健全な樹勢を維持し、適正な結果枝や結果母枝を確保するために間引き剪定と切り返し剪定を組み合わせで行いましょう。

(山口 和典)

花 き

◆電照ギク

1～2月に消灯する作型は花芽分化時期が1年中で最も低温期になりますので、夜温を十分に確保できるように暖房機の設定温度や停電・事故には十分注意しましょう。電照期間中に低温に遭遇した場合は、消灯1～2週間前から夜温15℃で予備加温を行って下さい。低温開花性系統の場合、消灯後は18時から1時までは15℃、1時以降は12℃の変温管理を行うと大幅には開花が遅れず、暖房コストの削減が可能です。また、再電照時期決定は必ず検鏡してから判断するようにして下さい。低温期はハウス内の湿度も高まりやすいので白さび病が多発します。十分な換気を行うとともに、各種防除手段を組み合わせ、予防を徹底しましょう。

◆スイートピー

11～12月の高温、曇雨天の影響を受け草勢が不安定な状況です。天気予報を確認しながら品種特性を考慮し、気象条件に合わせた草勢コントロールを行いましょ。地温の低下するこの時期の窒素肥料の追肥には、硝酸態窒素主体の液肥が効果的です。

また、天候が安定せず、ハウス内湿度が高まり、灰色かび病が発生しやすくなります。さらに、余分な芽や葉が多いと、曇天時に落蕾を助長します。不要な芽や葉は除去し、微生物農薬のダクト散布を行いましょう。

◆デルフィニウム

沿海地域のエラータム系は2番花以降の花穂が急速に抽だい・伸長しますので、採光を良くして硬さとボリュームを確保して下さい。

◆ホオズキ

早い産地では下旬から植え付けが始まります。土壌消毒では事前にビニールフィルム等でべたがけを行い、地温を上げておきましょう。また、健全な地下茎を使用し、本ほへの病気等の持ち込みを防ぎましょう。

◆ラナンキュラス

日中は採光のため内ビニールの開閉をしっかり行いましょう。日中は10℃を下回るような極端な低温管理ではなく、生育適温での管理を行いましょう。収穫が続くと草勢が低下しやすくなりますので、定期的に液肥を施用して草勢の維持を図り、安定的な採花を行いましょう。

(中村 広)

畜 産

◆家畜防疫対策

12月19日に川南町において高病原性鳥インフルエンザ(H5N6亜型)が発生しました。なお、11月28日の青森県での鳥インフルエンザ(H5N6亜型)の初発以降、本県を含む5道県7農場で続発しています。また、野鳥においても14道県91例(1月5日現在で疑い事例を含む)で、H5N6亜型の高病原性鳥インフルエンザウイルスが確認されており、養鶏農場へのウイルスの侵入リスクが非常に高まっています。

ウイルスを農場に侵入させないように飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底に努めましょう。具体的には、鶏舎内や鶏舎周囲の石灰消毒と防鳥ネットの再点検を早急に行い、ハトやスズメなどの野鳥の鶏舎への侵入を防止するとともに、ネズミなどの小動物が鶏舎内へ侵入しないよう対策を徹底しましょう。

豚では、PEDの散発が見られています。手洗いや消毒の徹底とともに、豚舎の作業動線の見直しや出荷車両の処理場および農場での水洗消毒の徹底を行いましょう。

◆家畜

今月は年間で最も寒く乾燥する時期であると同時に、舎内温度を維持するために畜舎を閉めきることから舎内が換気不足になる時期でもあります。気温が上がる昼間は畜舎カーテンを開け、換気扇やファンをゆっくりと回すなど換気を十分に行いましょう。また、乾燥すると埃や塵が呼吸器病の原因となりますので、湿度を適度に保つために細霧の噴霧などで、舎内が乾燥しすぎないようにしましょう。

哺乳子牛などの幼畜においては、隙間風や床の湿りは肺炎など病気の原因になるため、保温箱やコンパネによる風よけの設置とともに、赤外線ヒーターなどの保温器具を使用しましょう。また、子牛の寝床は常にきれいで乾燥した状態にして、コンクリートが露出しないようオガクズなどを厚めに敷きましょう。なお、投光器の保温効果は十分ではないので、他の効果の高い器具を使用しましょう。

(三角 久志)

工芸作物

◆茶

1 寒さ対策

寒風や急激な低温により、幼木園や中切り園では成葉の寒害や幹割れ（裂傷型凍害）等の凍寒害の発生が懸念されます。被害を受けやすい茶園では防風ネットの設置等による対策を行います。また、山間地では積雪による枝折れや裂傷防止対策も必要です。

2 定植ほ場の植え付け準備

降雨の少ない今月は、定植の準備を行う最終時期です。

定植後、摘採するまでに4～5年かかることから、一度植え付けると植え替えが難しいです。新植に当たっては地域の微気象や茶樹特性を理解した上で、品種やほ場を選定しましょう。

茶樹は湿害を受けやすいため、茶園の土壌は排水が良く耕土が深いことが求められます。

地下水位が高く、湧水が懸念されるほ場への定植は極力避けましょう。

また、粘質土壌で水はけが悪いほ場や水が流入するようなほ場は事前の対策が必要です。深耕による混層や明渠・暗渠等の対策を行います。

アルカリ性の土壌や改植茶園では土壌pHの調整やたい肥施用による地力増強を図ります。更に、土壌線虫被害が懸念されるほ場では早めに土壌消毒を行うことを心掛けましょう。

3 チャトゲコナジラミの発生確認

県内ではチャトゲコナジラミ発生茶園が徐々に拡大しています。この害虫は、茶葉の裏に幼虫が寄生して越冬します。茶葉の裏面を確認し、もし見慣れない虫を発見した際は、最寄りの農業改良普及センター等へ連絡してください。

(黒木 清人)

◆しいたけ

1 植菌と仮伏せ

植菌作業は玉切り後、できるだけ早めに行い、植菌後の原木は菌糸の活着を促進するため「仮伏せ」を行います。原木を地際から40cm以下の高さで横積みして笠木や遮光ネット等で被覆し、保温と保湿を図りましょう。

2 寒子づくり

寒子は厳寒期に採取される1年のうちで最も品質の良いしいたけです。肉厚のしいたけ生産が可能ですが、防風垣の設置など、ほだ場の湿度保持や袋かけ又はビニール被覆による保温・保湿に努め、しいたけの成長を促す必要があります。

また、散水を行う場合は、採取予定日の1週間前には止めて、日和子での採取を心がけるとともに、しいたけが凍結しないよう散水時間等にも注意しましょう。

3 採取

発生したしいたけは、目標とする品柄に応じ、若干早めに採取しましょう。

(永野 学)

◆たばこ

29年作は基本耕作技術を確実に実行し、気象に左右されにくい『力強い葉たばこ』づくりを目指し、品質・収量安定化に向けて取り組んでいきましょう。当面は『早作で根張りのよい充実した作柄』をつくるために、以下の作業を行いきましょう。

1 前作物等の関係で、たばこ予定ほ地の準備が遅れないように計画的な本畑準備作業を行いきましょう。

2 肥料設計は土壌検定結果及び前作物調査を参考にして行いましょう。

3 堆肥は良質完熟堆肥を施用し、散布はすじまき散布を行いきましょう。また、大柄晩作化やグレー葉生出防止のためにも未熟堆肥投入は避けましょう。

1 ねり畦防止のため、施肥畦立は土壌水分が60%程度（土を手で握って広げ、できた塊を指で押した時に2～3個に割れる状態）を目安に移植1ヶ月前までに実施しましょう。また、あわせて水田・畑を問わず、ほ地周囲や枕地に排水溝を完備しましょう。

5 肥土消毒や土壌消毒を行う際には、農薬使用基準に従って実施しましょう。

（宮崎県たばこ耕作組合）

内容の詳細について

1月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

（<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>）

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	ハスモンヨトウ 病害全般	—	<p>本年は平年に比べ気温が高く推移しているためハスモンヨトウの被害が見られます。早期発見に努め若齢幼虫期に防除します。</p> <p>コスト低減のため、夜温を低めに管理したりハウスを多重・多層被覆にしているところでは、施設内が多湿になりやすく病害の発生が助長されるので、換気や早朝加温など適切な温湿度管理に努めます。</p>
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病 灰色かび病 菌核病 つる枯病	並 やや少 並 並 並	<p>うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病気は高温、多湿条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。</p> <p>また、罹病葉は重要な感染源となるので適宜除去し、ほ場外に持ち出し適切に処分します。</p>
	黄化えそ病 (MYSV) ミナミキイロアザミウマ	前年、前々年より多い やや少	<p>感染株を確認した場合は、速やかに抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。</p> <p>また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、最少でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。</p>
	病害虫全般(改植時の留意点)	—	<p>ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は20日間以上蒸し込みます。</p> <p>また、前作に褐斑病などの発生があった場合は、後作きゅうりの定植後直ちに予防散布し感染を防ぎます。</p>
冬春ピーマン	斑点病 ※ うどんこ病 菌核病 黒枯病 ※	並 やや少 並 やや多	<p>いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。</p> <p>また、罹病葉は重要な感染源となるので適宜除去し、ほ場外に持ち出し適切に処分します。</p>
	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハアザミウマ	やや少 やや多	<p>この時期は卵・幼虫・蛹・成虫が混在しており、卵と蛹には防除効果が低いので、最少でも7日間隔で3回の連続防除を行い、多発しているときはさらに追加防除を行います。</p>
冬春トマト	葉かび病 灰色かび病 うどんこ病 すすかび病※	並 並 並 前年と同程度	<p>すすかび病の発生が多くなっており、防除情報を発表しています。</p> <p>灰色かび病は、例年1月からの発生が多くなる傾向があるため低温多湿にならないよう日中の換気、夜間の保温に努めます。</p>
	カ、コナジラミ類	並	<p>また、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努めます。</p> <p>トマト黄化葉巻病の発病株は、必ず株全体を除去し、土中に埋めるかビニール袋に入れて枯れるまで密閉します。</p>
冬春いちご	うどんこ病	やや少	<p>多発すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおきます。</p>
	炭疽病	並	<p>炭疽病の発病した株は、早期に除去し新たな感染を防止します。</p>
	ハダニ類 アブラムシ類	並 並	<p>ハダニ類は寄生数が増加してからの防除は難しくなるので低密度時に防除を徹底します。</p> <p>また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。</p>

- 1) ※は防除情報を発表しています。
- 2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
- 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。



(病害虫防除・肥料検査センター)